

日本人の大学生と高校生の言語表現について お金の要求に対する「断り」表現の相違点

権 英 秀

Abstract

I studied “Refusal” expressions by Japanese university students and High school students. The results of my Discourse Role Tests show:

The university students and the high school students used different Semantic formulas of “Refusal”.

The university students and the high school students used different “Refusal” strategies for The Inside Group and The Outside Group.

The high school students are different from the university students in The First “Refusal” strategies and The Second “Refusal” strategies.

キーワード…… 談話ルール 意味公式 ウチ ウチ

1. はじめに

さまざまな発話行為¹⁾の中で、相手の望みや意図に反さざるを得ない「断り」発話行為は、人間にとって使いづらいものの1つであろう。なぜなら、「断り」発話行為は依頼者と断る側の両方の面子をつぶし合う可能性が高く、お互いの人間関係に重要な影響を与えるからである。そのため、人間は「断り」発話行為を行う際は、より慎重に表現を表わさなければならない。ここでの慎重さとは相手との「年齢の差」、「親疎関係」、「性別」などを考慮しながら適切に断ることであろう。

「断り」に関する先行研究として、生駒・志村(1992)、熊井(1993)、藤森(1996)、任(2003)などが挙げられる。この研究のすべてが日本人と留学生を対象に「断り」表現を比較したものである。その中で日本人の「断り」表現の特徴をまとめてみると、以下のようである。

1 回目の「断り」行動において「理由説明」を用いた消極的な回避としての「延期」が見られる。 (熊井)

2 回目の「断り」行動では、1つの理由を繰り返したり具体化したりして、相手に事情を分かってもらおうという方略を取っている。 (熊井)

「代案」、「間接的な断り」、「約束」をよく使う。 (生駒・志村)

1 回目の「断り」では「ためらい」²⁾、「情報要求」が、2 回目の「断り」では「理由」、「関係修復」、「代案」、「詫び」がよく見られる。 (任炫樹)

本稿では、先行研究のデータに照らし合わせながら、日本人のみに限って研究したい。特に日本人の大学生と高校生の「断り」表現に焦点をあて、「断り」表現の相違点、「断り」表現のストラテジー・シフトなどを研究する。さらに「ウチ である家族」と「ウチ である親しいグループ」における大学生と高校生が感じる「親しみ」が及ぼす「断り」ストラテジーにも注目したい。

2. 調査

調査期間： 大学生 - 2004 年 10 月、高校生 - 2006 年 7 月～8 月

調査対象者： 満 19～21 才の新潟大学生 - 50 人

満 17～18 才の新潟市北越高等学校生と三条商業高等学校生 - 50 人

場面の設定： 三宅の分類方（ウチ 、ウチ 、ヨソ、ソト）³⁾に従ったが、今回はウチ とウチ に絞って「親しみ」があるという両グループにおける「断り」表現を分析するために次のように設定した。

表 1) ウチ とウチ の構成表

場面	親疎関係	内容
場面 1	ウチ	家族の関係
場面 2	ウチ	家族以外でごく親しい関係 例) クラブやサークル関係

調査方法： これまでの「断り」研究には主に 2 つの調査方法が使われている。1 つは談話完成テスト (Discourse Completion Test : 以下 DCT に略) であり、与えられた質問に答えを書き込むものである。これは短期間のうちに大量のデータが得られるという長所がある反面、書き込む方式のために答えは書き言葉になりがちである。2 つ目はロールプレー (Role play) である。DCT の代わりに最近多くの研究者から使われている方法であり、働きかける人とインフォーマントの会話を分析するものである。そのため、DCT より自然な会話分析が可能であるがたくさんのデータを集めるには限度がある。従って、今回は両調査の長所を考慮し、ロールプレーと DCT を組み合わせた以下のような談

話ルールをもって調査を行った。

表2) 談話ロールの構成表

<p>談話完成テスト (<u>Discourse Completion Test</u>) (多数の資料を集められる・答えが短く、資料の処理が簡単)</p> <p style="text-align: center;">+</p> <p>ロールプレー (<u>Role play</u>) (談話完成テストより自然な会話を取ることができる、 turn-taking・同じ情報の繰り返し・同じ意味公式の繰り返しが現れる)</p> <p>談話ロール (<u>Discourse Role Test</u>)</p>

調査内容： 普段頼まれそうにない依頼内容で調査を行い、工夫しながら断るように設定した。

表3) 場面の台詞 (依頼内容)

場面 1	<p>あなたは相手の弟・妹役です。あなたは兄・姉さんに一万円のお金を貸してくれるように要求します。台詞のとおり要求してください。もし一度断られたら、自然な調子で次の台詞を読んでください。</p> <p>貴方 ; (相手に対して) お兄ちゃん / (お姉ちゃん) ! 今月お金やばいから一万円かしてくれない?</p> <p>相手の断りを待ってください。</p> <p>貴方 ; (相手に対して) 来月すぐ返すから、お願い! 貸して!</p>
場面 2	<p>あなたは相手の親しい後輩役です。あなたは先輩さんに一万円のお金を貸してくれるように要求します。台詞のとおり要求してください。もし一度断られたら、自然な調子で次の台詞を読んでください。</p> <p>貴方 ; (相手に対して) ちょっと悪いんですけど。今月お金がやばくて、お金貸してほしいんですけど、一万円貸してもらえますか?</p> <p>相手の断りを待ってください。</p> <p>貴方 ; (相手に対して) 来月ちゃんと返しますから、お願いします。</p>

働きかける人に表3)で示した台詞を渡し、調査対象者の前で役にふさわしい声のトーンで演技してもらった。

そして調査対象者は働きかける人と1対1で会話をしているように雰囲気をつくり、練習を通してなるべく話し言葉で答えるようにお願いした。以下は調査対象者に渡した「談話ロール紙」である。

表4) 談話ロール紙

場面1に対する談話ロール紙	<p>あなたは兄・姉役です。自分の弟・妹から何かを要求されます。でも、あなたはその要求が気に入りません。最大限、自分が日常生活で使っている言葉遣いで工夫しながら最後まで断り続けてください。</p> <p>1回目の返事(断り); _____。</p> <p>2回目の返事(断り); _____。</p>
場面2に対する談話ロール紙	<p>あなたは先輩役です。自分の親しい後輩から何かを要求されます。でも、あなたはその要求が気に入りません。最大限、自分が日常生活で使っている言葉遣いで工夫しながら最後まで断り続けてください。</p> <p>1回目の返事(断り); _____。</p> <p>2回目の返事(断り); _____。</p>

3. 「断り」戦略⁴⁾の分類

調査結果は、Beebe et al. (1990) や熊井 (1993) などの「意味公式」⁵⁾の分類を参考の上、若干修正を加えて、以下のように分類した。

表5) 意味公式の分類

意味公式	意味公式の内容および例
「直接的断り」	<p>単刀直入に断るもの</p> <p>例) お断りする。</p> <p>例) いやだ。</p>
「理由」	<p>断らざるを得ない状況説明</p> <p>例) お金がないから。</p>
「謝罪」	<p>断ることに対するお詫び</p> <p>例) ごめんね。</p>
「回避」	<p>冗談・繰り返し・ヘッジ・話題転換・沈黙など</p>

	例) ちょっとあれなんだね。
「情報要求」	相手に情報を聞くもの 例) どこに使うの?
「条件提示」	断りの担保 例) 5000円なら貸せるんだけど。
「代案提示」	別の解決案を出す 例) **にあたってください。
「非難」	相手や要求内容について責める 例) いやだって言っているでしょ。 例) なんでそんなにつかつたん。
「その他」	上記に該当しないもので、約束や共感の気持ちなど 例) また今度。 例) そうなの!

4. 両グループの「断り」ストラテジー分析

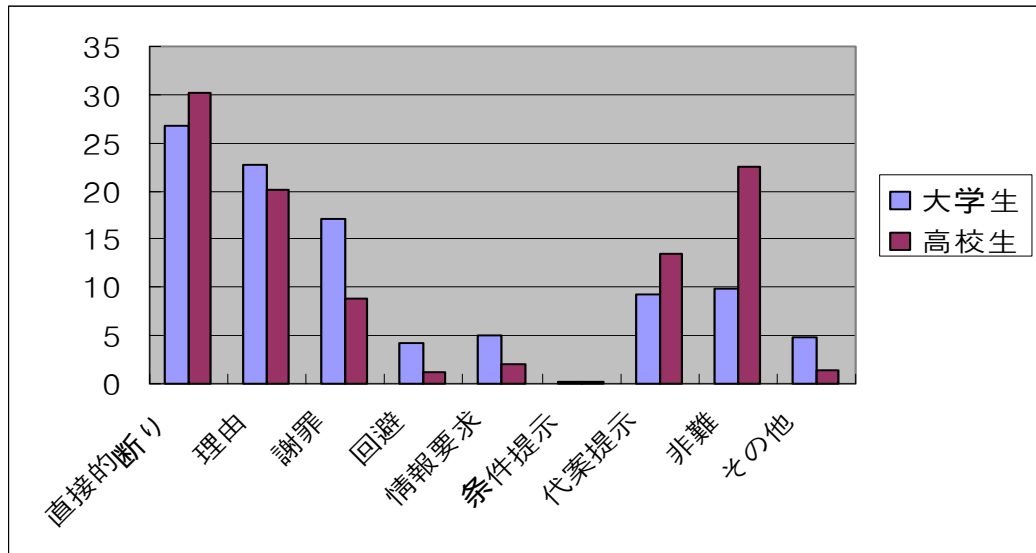
4.1 意味公式の使用頻度

日本人の大学生と高校生の「談話ルール」を「意味公式」に基づき、分類した。各場面における「断り」の意味公式の使用頻度を次のようにまとめる。

表6) 大学生と高校生の「断り」の意味公式の使用頻度

	直接的断り	理由	謝罪	回避	情報要求	条件提示	代案提示	非難	その他	合計
大学生	111 26.7	94 22.7	71 17.1	18 4.3	21 5.1	1 0.2	38 9.2	41 9.9	20 4.8	415回 100%
高校生	99 30.1	66 20.1	29 8.8	4 1.2	7 2.1	1 0.3	44 13.4	74 22.5	5 1.5	329回 100%

グラフ



日本人の大学生と高校生において、場面1と場面2の「断り」表現を構成している意味公式の使用頻度を見てみると、主に「直接的断り」、「理由」、「謝罪」、「代案提示」、「非難」の意味公式が使用されていることが分かった。この意味公式において、先行研究で分析されたデータ（「代案」、「間接的な断り」、「約束」をよく使う・「ためらい」、「情報要求」、「関係修復」、「代案」がよく見られる）から見ると、日本人の大学生と高校生は「直接的断り」を最も使用しており、「約束」のような「その他」や「条件提示」の意味公式は他の意味公式よりあまり使用されなかったことが分かった。

例1)

日本人の妹から：**ちゃん！ 今月お金やばいから一万円かしてくれない？

調査対象者：えっ、や～だ。あたしも今月金欠だから。

（直接的断り + 理由）

調査対象者：はっ！？ どこにそんなに使ったん。 無理無理。

（非難 + 直接的断り）

日本人の大学生と高校生の「断り」表現の多くは、上の例1)のようにより単刀直入に「断り」を行っている。今回大学生と高校生は親しみのある人からの要求であるために、「約束」などの断った後の人間関係を修復しようとする動きも見えず、「ためらい」や「情報要求」の意味公式も全体の意味公式の使用頻度では少なく現れたと思われる。すなわち、それほど相手との

親疎関係に対して親密関係であると思っており、相手に対して積極的姿勢を見せなかったと考えられる。これ以外に表6)のデータから指摘できることは以下のとおりである。

日本人の大学生は家族や親しいグループであるウチ とウチ に対して「直接的断り」>「理由」>「謝罪」>「非難」>「代案提示」の順の使用頻度を見せている。

日本人の高校生は家族や親しいグループであるウチ とウチ に対して「直接的断り」>「非難」>「理由」>「代案提示」>「謝罪」の順の使用頻度を見せている。

相手にヤワラカク断るストラテジー（「理由」・「謝罪」・「回避」・「情報要求」・「その他」）は、日本人の高校生より日本人の大学生の方から多く見られる。

相手にキツク断るストラテジー（「直接的断り」・「代案提示」・「非難」）は、日本人の大学生より日本人の高校生の方から多く見られる。

4.2 両グループの「断り」意味公式の差異

大学生と高校生の「断り」の意味公式の使用頻度において、特に高校生より相手に一層ヤワラカク断った大学生の「意味公式」と大学生より相手に一層キツク断った高校生の「意味公式」を触れてみる。

4.2.1 「理由」・「謝罪」・「回避」・「情報要求」・「その他」について

「理由」意味公式は相手に断らざるをえない物事を説明するものである。特に家族やごく親しみのあるグループにおける「理由」表現は相手から事情をわかってもらおうとする働きをし、相手にポジティブな印象を与えるのである。さらにより相手に積極的な姿勢が見せられる意味公式には「謝罪」・「回避⁶⁾」・「情報要求」などもある。次の例を見てみよう。

例2)

親しい後輩から： ちょっと悪いんですけど。今月お金がやばくて、

お金貸してほしいんですけど、一万円貸してもらえますか？

調査対象者： そうなの。でも俺も今ちょっとやばいから貸せない。悪い。

（その他 + 理由 + 直接的断り + 謝罪）

調査対象者： ごめん、そんな大金貸せるわけないだろう。どこに使ったの？

（謝罪 + 非難 + 情報要求）

大学生の場合、上記のように「相手に会話の場に積極的に参加している」ように思わせる意

味公式である「理由」・「謝罪」・「回避」・「情報要求」・「その他」を多様に使用している。このような意味公式は“貸せない”や“そんな大金貸せるわけないだろう”のように、相手のメンツを潰したり、その場の雰囲気気まぐささせたりする可能性が高い「直接的断り」や「非難」などを和らげるために多く使用されていると思われる。今回の調査において「理由」・「謝罪」・「回避」・「情報要求」・「その他」の使用頻度は大学生 224 回（53.0%）、高校生 111 回（33.7%）であり、相手に積極的な印象や柔らかい「断り」表現を多く使用するの日本人の大学生であることが分かった。

4.2.2 「直接的断り」・「代案提示」・「非難」について

「理由」・「謝罪」・「回避」・「情報要求」・「その他」の意味公式と違って、「直接的断り」・「代案提示」・「非難」の意味公式は相手にアカラサマに断ったり、依頼の受け入れる責任を第3者に転嫁したり、また相手や要求内容などを非難するものである。

例 3)

1 回目の要求：ちょっと悪いんですけど。今月お金がやばくて、

お金を貸してほしいんですけど、一万円貸してもらえますか？

調査対象者：それは無理。おれはお金の貸し借りはしないんだ。

調査対象者：ふざけんな。

2 回目の要求：来月すぐ返すから、お願い！ 貸して！

調査対象者：だから無理って言ったろう。お母さんに頼めばいいじゃん！

（非難 + 代案提示）

調査対象者：自業自得だ。自分で稼げ！

（非難 + 代案提示）

上記の調査対象者はすべてが「非難」の後、「代案提示」を行う「断り」である。まず、1 回目の「断り」として“無理だ”と言っても再び要求されたことに対して「非難」を用い、対策として第3者であるお母さんに責任を転嫁してその場を逃れようとしている。「断り」では、お金を多く使用したことについて責めながら、要求者に責任を転嫁している。両方ともキツイ印象を与え、自分の負担を回避するように見える。今回相手にキツク断る意味公式は大学生 190 回（45.8%）、高校生 217 回（66%）が使用された。よって、相手にやわらかく断る大学生と異なって、高校生は直接的であり、相手のメンツを強くつぶす「断り」を使用していると見なされる。

5. 「断り」戦略・シフトについて

ここでは、熊井（1992）、任（2003）、権（2005）の先行研究のように、1回目の要求に対する1回目の「断り」と再び要求された2回目の要求に対する2回目の「断り」の意味公式・シフトについて分析する。

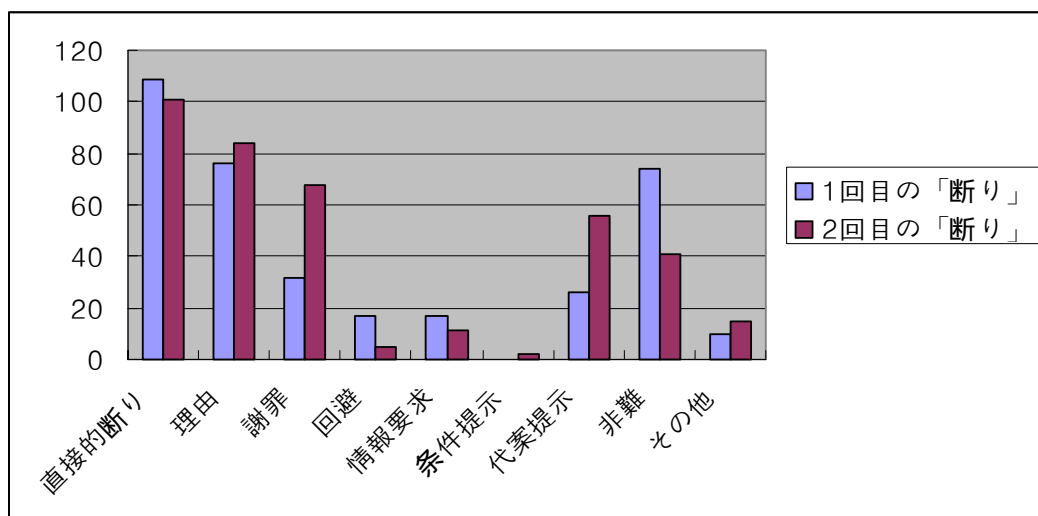
5.1. 1回目の「断り」と2回目の「断り」

日本人の1回目の「断り」と2回目の「断り」意味公式を分析すると以下ようになる。

表7) 大学生と高校生の1回目と2回目の「断り」の意味公式の使用頻度

	直接的断り	理由	謝罪	回避	情報要求	条件提示	代案提示	非難	その他	合計
1回目	111 26.7	94 22.7	71 17.1	18 4.3	21 5.1	1 0.2	38 9.2	41 9.9	20 4.8	415回 100%
2回目	99 30.1	66 20.1	29 8.8	4 1.2	7 2.1	1 0.3	44 13.4	74 22.5	5 1.5	329回 100%

グラフ



日本人の1回目の「断り」と2回目の「断り」の意味公式・シフトを見ると、主に使用されているのは「直接的断り」と「理由」である。この2つの意味公式は「断り」表現に欠かせないものであり、1回目でも2回目でも使用頻度が多かったと考えられる。1回目の場合、日本人は「直接的断り」、「回避」、「情報要求」、「非難」の意味公式を多く使用している。4つの意味公式はすべてが相手や要求の会話場から逃れようと働きをするものである。この中でも「情報要求」は積極的な印象を与えるモノであるものの、その中身を見ると“いったいどこに使ったん”、“どこに使うの”のように相手の答えから「断り」を探す目的があるように見られる。

例4)

1回目の要求：ちょっと悪いんですけど。今月お金がやばくて、

お金貸してほしいんですけど、一万円貸してもらえますか？

調査対象者：え～、どこに使う？ そんなお金ないから、貸せない。

調査対象者：ふざけんな。いったいどこに使うん？

2回目の要求：来月すぐ返すから、お願い！ 貸して！

調査対象者：だからどこに使うの？

（情報要求）

調査対象者：俺も貸してほしいぐらいだよ。で、どこに使うの？

（回避 + 情報要求）

例4)の調査対象者は1回目で情報要求を求めている。しかし、相手はその質問に答えず、再びお願いをしている。これに対して、調査対象者はお金の使用について答えられなかったことに不思議を感じながら、再度情報要求を求めたと思われる。よって、調査対象者は「情報要求」によって、一見相手に要求に対する注目を示している反面、相手からの答えをもって「断り」を正当化しようと模索していることが分かった。

反面、日本人の2回目の「断り」では、「理由」、「謝罪」、「非難」、「条件提示」、「代案提示」、「その他」が1回目より多く使用された。この意味公式では、特に2回も断り続けることに対する罪悪感、即ち、人間関係を考慮した「謝罪」、何か解決策と一緒に考える「代案提示」や「条件提示」、さらに要求されることや大金を使用した依頼者に対する「非難」などの使用頻度が非常に多くなった。そして「その他」もまた多く使用されたが、内容を見ると、相手の置かれている状況に同感して安心させる“そうなの”、“事情は分かるんだけど”“お金あれば貸してあげたいんだけど”の表現が多かった。

5.2. 日本人の大学生の「断り」戦略・シフト

日本人の大学生は1回目の「断り」と2回目の「断り」において、どのような意味公式・シフトが行われるかを分析したところ、次のような結果が得られた。

表8) 大学生の1回目と2回目の「断り」意味公式の使用頻度

	回目	直接的断り	理由	謝罪	回避	情報要求	条件提示	代案提示	非難	その他	合計
大学生	1回目	62 30.0	45 21.7	31 15.0	14 6.8	11 5.3	0 0	11 5.3	24 11.6	9 4.3	207回 100%
	2回目	49 23.6	49 23.6	40 19.2	4 1.9	10 4.8	1 0.5	27 13.0	17 8.2	11 5.3	208回 100%

グラフ

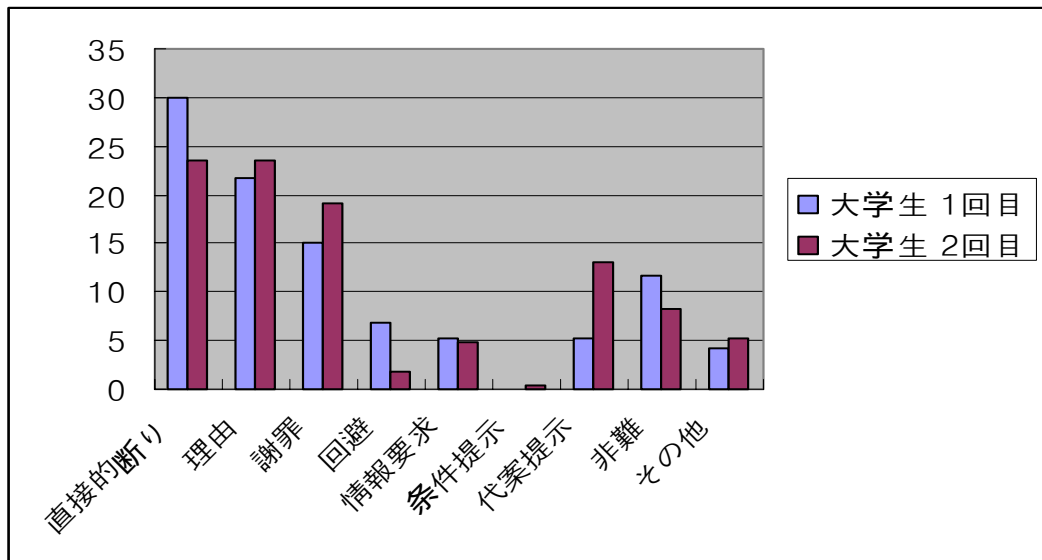


表8) から分かる大学生の「断り」の意味公式・シフトは次のようである。

2回目に比べて、1回目の方において、「直接的断り」、「回避」、「非難」が多く使用されている。

1 回目と比べて、2 回目の方において、「理由」、「謝罪」、「代案提示」、「その他」が多く使用されている。

日本人の大学生の 1 回目と 2 回目の意味公式・シフトでは、ズバリ断る「直接的断り」や相手の面子をつぶす可能性が高い「非難」などが 1 回目で多く使用されたが、「断り」が相手に受け入れられず、再び要求されたことに対して、大学生の場合は、「直接的断り」、「回避」、「非難」を変更してより相手に分かってもらおうとする「理由」、2 回も断らざるをえないことに対する「謝罪」、要求内容に対する解決策としての「代案提示」などが見られた。

例 5)

1 回目の要求： 今月お金やばいから一万円かしてくれない？

調査対象者：え～、いやだよ。俺はオマエの扶養義務はないから、・・・。

（直接的断り + 理由 + 回避）

調査対象者：まじで？ ふざけんな。無理に決まってるだろう！

（非難 + 直接的断り）

2 回目の要求：来月すぐ返すから、お願い！ 貸して！

調査対象者：あたしもほしいものがあるさ。お母さんに頼んでみれば！

（理由 + 代案提示）

調査対象者：ごめん、何度も言われても、お金がないから。自分でなんとかしろ。

（謝罪 + 理由 + 代案提示）

の調査対象者は 1 回目では、「直接的断り」、「理由」、「回避」の順に「断り」を構成して「代案提示」のような責任転嫁の代わりに、話者の「断り」について正当化している。しかし、1 回目の「断り」が失敗したら 2 回目では 1 回目と異なる「理由」と第 3 者に目を向かせる「代案提示」を示している。

では、「非難」、「直接的断り」の順にキツク相手に断っている。しかし、2 回目では「謝罪」、「理由」、「代案提示」に変更し、より相手を宥める方法としてやわらかく断っている。

よって、日本人の大学生は、1 回目の「断り」では、より相手側や要求内容を責める「非難」のように相手に強く言い切るような「意味公式」が多く、2 回目の「断り」では、断る側の立場の「説明」や第 3 者に責任を転嫁し、その場を逃れるような「意味公式」が多く使用していると考えられる。

5.3. 日本人の高校生の「断り」戦略・シフト

日本人の高校生は1回目の「断り」と2回目の「断り」において、どのような意味公式・シフトが行われるかを分析したところ、次のような結果が得られた。

表9) 高校生の1回目と2回目の「断り」意味公式の使用頻度

	回目	直接的断り	理由	謝罪	回避	情報要求	条件提示	代案提示	非難	その他	合計
高校生	1回目	56 33.9	35 21.2	16 9.7	1 0.6	3 1.8	0 0	19 11.5	32 19.4	3 1.8	165回 100%
	2回目	43 26.2	31 18.9	13 7.9	3 1.8	4 2.4	1 0.6	25 15.2	42 25.6	2 1.2	164回 100%

グラフ

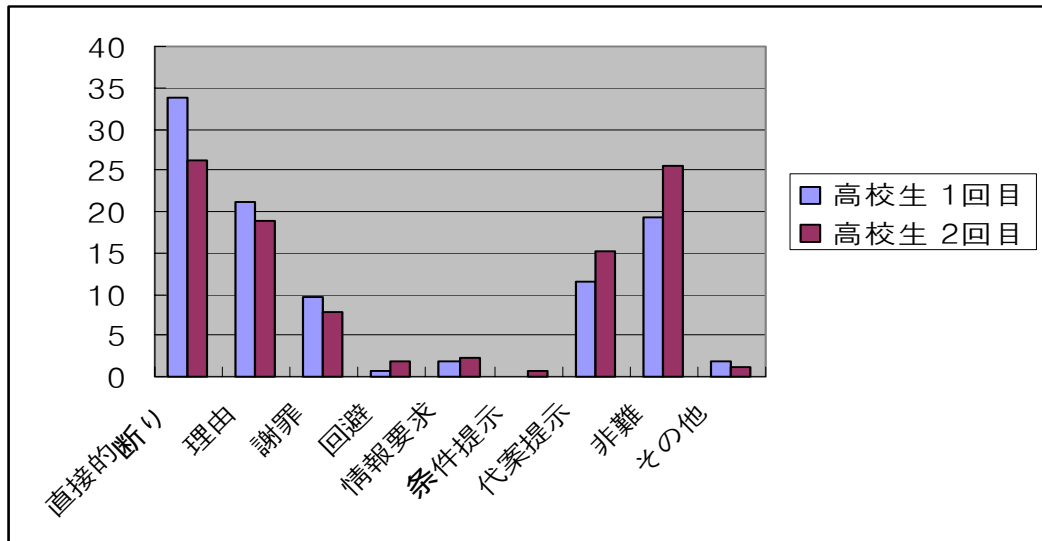


表9) から分かる高校生の「断り」の意味公式・シフトは次のようである。

2回目に比べて、1回目の方において、「直接的断り」、「理由」、「謝罪」、「その他」が多く使用されている。

1回目に比べて、2回目の方において、「回避」、「情報要求」、「条件提示」、「代案提示」、「非難」が多く使用されている。

日本人の高校生の1回目と2回目の「断り」の意味公式・シフトでは、1回目において積極的な印象を与えられる「情報要求」、「条件提示」、「代案提示」と相手を責める「非難」などの代わりに、「断り」の基本な構成である「直接的断り」と「理由」、そして「謝罪」と「その他」の使用頻度が多かった。しかし、1回目の「断り」失敗後には高校生の場合、よりポジティブな姿勢に変わったことが分かる。

例6)

1回目の要求：ちょっと悪いんですけど。今月お金がやばくて、

お金貸してほしいんですけど、一万円貸してもらえますか？

調査対象者：悪いんだけど、ちょっと俺もお金なくて・・・。

（謝罪 + 理由）

調査対象者：そうなの？ でも俺は友達にお金を貸さない主義なんで、ごめん。

（その他 + 理由 + 謝罪）

2回目の要求：来月すぐ返すから、お願い！ 貸してもらえますか！

調査対象者：だから無理だって。1000円なら貸せるけど。

（非難 + 条件提示）

調査対象者：う～ん、でも1万はちょっと・・・。

（回避）

の調査対象者は、1回目では丁寧に貸せないことに対して謝りながら、「断り」の理由を挙げている。しかし、相手に「断り」が受け入れられなかったので、2回目ではキツク非難を用いて断っている。さらに相手の面子を考えて「条件提示」という関係修復も使用していることが分かった。

これに対して、の場合、1回目においては、相手の事情に憐憫を感じるように言いながら、のように「理由」と「謝罪」をもって断っている。しかし、2回目では再び要求に責められてヘッジという消極的な「回避」に変更している。

よって、日本人の大学生と高校生の1回目と2回目の「断り」意味公式では、大きな差が見られた。まず、2回目に比べ、1回目により多く使用された「意味公式」には、大学生の場合、「直接的断り」、「回避」、「非難」があり、高校生の場合には、「直接的断り」、「理由」、「謝罪」、「その他」がある。そして1回目に比べ、2回目により多く使用された「意味公式」には、大学生の場合、「理由」、「謝罪」、「代案提示」、「その他」があり、高校生の場合、「回避」、「情報

要求」、「条件提示」、「代案提示」、「非難」がある。これを分析してみると、大学生と高校生の「直接的断り」は1回目で、「代案提示」は2回目でより多く使用されている共通点が見られた。しかし、それ以外の1回目で使用頻度が多かった「意味公式」はお互いに対照的である。大学生の「回避」、「非難」は高校生が1回目より2回目で多く使ったモノであり、高校生の「理由」、「謝罪」、「その他」は大学生が1回目より2回目で多く使ったモノである。

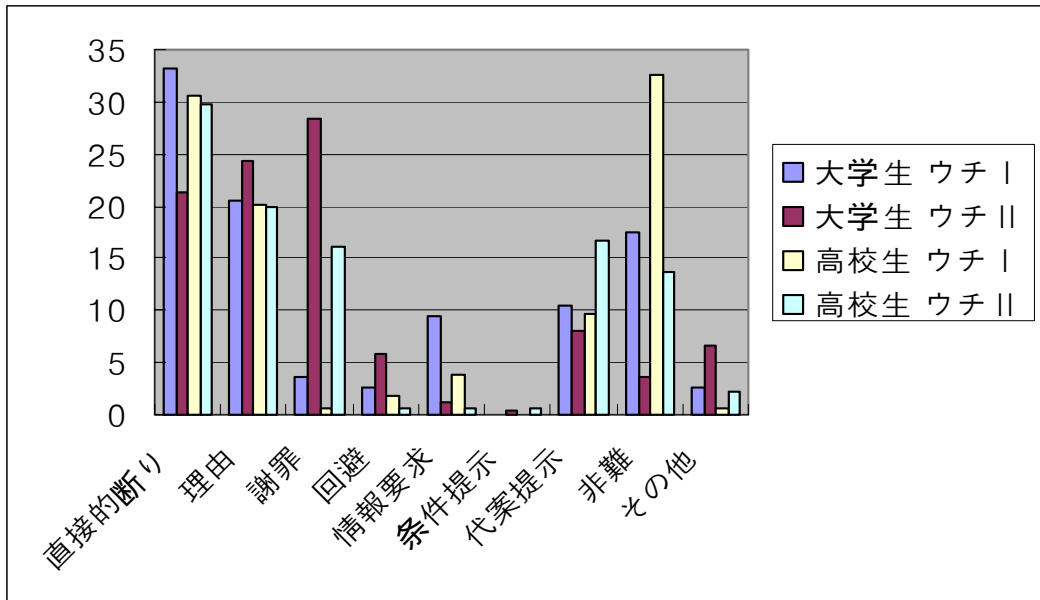
6. 大学生と高校生のウチ とウチ の「断り」の相違点

ここでは、大学生と高校生が家族であるウチ と家族ではないが、ごく親しいグループであるウチ に対する「断り」を比べ、「親しみ」による言語表現を分析してみる。

表10) 大学生と高校生のウチ とウチ の「断り」

	ウチ	直接的断り	理由	謝罪	回避	情報要求	条件提示	代案提示	非難	その他	合計
大学生		63 33.2	39 20.5	7 3.7	5 2.6	18 9.5	0 0	20 10.5	33 17.4	5 2.6	190回 100%
		48 21.3	55 24.4	64 28.4	13 5.8	3 1.3	1 0.4	18 8	8 3.6	15 6.7	225回 100%
高校生		47 30.5	31 20.1	1 0.6	3 1.9	6 3.9	0 0	15 9.7	50 32.5	1 0.6	154回 100%
		52 29.7	35 20	28 16	1 0.6	1 0.6	1 0.6	29 16.6	24 13.7	4 2.3	175回 100%

グラフ



この分析からまとめてみると次のようなデータが得られる。

大学生のウチⅠはウチⅡに比べて、「直接的断り」と「情報要求」、そして「非難」が多く使用された。

大学生のウチⅡはウチⅠに比べて、「理由」と「謝罪」が多く使用された。

高校生のウチⅠはウチⅡに比べて、「情報要求」、「非難」が多く使用された。

高校生のウチⅡはウチⅠに比べて、「謝罪」と「代案提示」が多く使用された。

日本人の大学生と高校生におけるウチⅠは、ウチⅡに比べて同じ「情報要求」、「非難」が多く使用された。これは家族という「親しみ」における共通の意味公式と思われる。1万円という大金の借金についての使用用途の「情報要求」と1万円も使わなければならないことに対する「非難」が多かった。ただし、大学生は「直接的断り」というアカラサマに断る表現も多く使用し、高校生との相違点が見られた。

よって、ウチⅠ（家族）に対して、大学生と高校生は家族という親しみにより、相手を心配するような「情報要求」と叱るような「非難」が使われている。その上に大学生はよりはっきりした「断り」を好むことが分かった。

これに反して、日本人の大学生と高校生におけるウチⅡでは、ウチⅠに比べて「謝罪」が多く使用された。しかし、2回目では大学生と高校生の「意味公式」に対照的なところが見えた。

まず、大学生は2回目で「理由」、「回避」を多く使用した。これは1回目の「断り」の失敗後に、より「断り」の合理性を主張することである。これに対して、高校生は2回目で「代案提示」を用いて断ることが多かった。「代案提示」には“お母さんに頼めば”、“他の人にあたってくれない”のような第3者に責任転嫁をする表現が多く、できるだけ早くその場を逃れようとする表現が多かった。

よって、ウチ に対して、大学生と高校生はごく親しい関係という認知により、人間関係や相手を考慮するような「謝罪」を多く使用した。そして大学生は自分の事情により断らざるをえない「理由」を説明したり、高校生はお金の要求から責任を回避しつつ、相手にポジティブな印象を与えようとしたりする「代案提示」を多く使用するという両グループの対照的な特徴が分かった。

7. まとめ

以上、意味公式により、日本人の大学生と高校生を対象にして、「断り」全体の意味公式のパターン、日本人の1回目の「断り」と2回目の「断り」の意味公式・シフト、大学生と高校生の1回目と2回目の「断り」の意味公式・シフト、大学生と高校生のウチ とウチ の「断り」の意味公式・シフトについて対照してきた。各分析の結果を見ると次のようである。

お金に対する「断り」について、高校生に比べて、大学生は全体的に相手にやわらかく断る意味公式を好んでいる。

日本人は1回目では「直接的断り」、「回避」、「情報要求」、「非難」を、2回目では、「理由」、「謝罪」、「非難」、「条件提示」、「代案提示」、「その他」を多く使用している。

大学生と高校生において、2回目に比べ、1回目では、大学生は「直接的断り」、「回避」、「非難」を、高校生は「直接的断り」、「理由」、「謝罪」、「その他」を多く使用する反面、1回目に比べ、2回目では、大学生は「理由」、「謝罪」、「代案提示」、「その他」、高校生は「回避」、「情報要求」、「条件提示」、「代案提示」、「非難」を多く使用した。

大学生と高校生はウチ とウチ において、1回目では「情報要求」、「非難」を、2回目では「謝罪」を共通に多く使用する上で、大学生は1回目で「直接的断り」、2回目で「理由」を、高校生は2回目で「代案提示」を多く使用した。

このように日本人の大学生と高校生という年齢層の相違により、「断り」戦略と、1回目の「断り」と2回目の「断り」、そしてウチ とウチ による「断り」に変化があることが分かった。今後の研究では、年齢層を広げて研究をする必要があると思ひ、本研究がそのパ

イロットスタディとしての基礎研究になったとすれば幸せである。

<注>

- 1) 現代言語学辞典（1988）によれば、「発話（utterance）時における種々の行動または役割を総称的に指す用語」と定義されている。
- 2) 任(2003)は断り行為のワン・クッション、シグナルと定義しており、“あーそうですね”と例えている。
- 3) 三宅(1994)p.31、「ウチ：家族やごく親しい人々」「ソト：親しくないが自己やウチと関連がある人々」「ヨソ：自己やウチと関係がない人々」
- 4) 断るための戦略。ここでは方略型と意味公式を示す。
- 5) ここでの意味公式とは、より細かく分類した「断り」のストラテジーの種類と考えてよい。
- 6) ここでの回避は冗談・話題転換・繰り返しを示す。

<参考文献>

- 生駒知子・志村明彦（1992）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号 pp.41 - 51。
- 熊井浩子（1993）「外国人の待遇行動の分析（2） - 断り行為を中心にして - 」『静岡大学教養部研究報告』第28巻 第2号 pp.1 - 37。
- 権英秀（2005）『『断り』表現から見た日・韓両言語の対象研究』新潟大学大学院修士論文。
- 田中春美他編（1988）『現代言語学辞典』成美堂。
- 任炫樹（2003）「日韓両言語における断りのストラテジー - 言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心に - 」『ことば』24 現代日本語研究会 pp.60-77。
- 藤森弘子（1996）「関係修復の観点からみた『断り』の意味内容 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較」『大阪大学言語文化学』Vol.5 pp.5 - 15。
- 三宅和子（1994）「日本人の言語行動パターン - ウチ・ソト・ヨソ意識 - 」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』第9号 筑波大学 pp.29 - 39。
- Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990) “Pragmatic Transfer in Refusals.” In R.C.Scarcella, E.Anderson & S.C.Krashen (eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. NewYork : pp.55-73, Newbury House Publishers.

主指導教員（大石強教授） 副指導教員（船城俊太郎教授・山内志朗教授）